

2022/06/20

理事長挨拶



奥山隆平
(信州大学医学部
皮膚科学教室)

昨年は9月に石原和之先生が天に召されました。山崎直也先生がSJCJ(Cancer誌Vol.36(2))に追悼文を書いてくださいました。われわれ学会員にとって大きな悲しみでありますとともに、患者さんご家族様にとっても喪失であります。皮膚がん診療と研究の発展に力を尽くされた石原先生のご遺志を継承していくことは我々の使命と心に刻むところであります。

今年度の学術大会は、6月24～25日に弘前市とオンラインのライブ配信のハイブリッドで開催されます。新型コロナウイルスの対応が求められる中、澤村大輔教授をはじめ弘前大学皮膚科学教室の皆様には大きなご負担をおかけしますが、どうぞよろしくお願います。

さて、前委員長の菅谷誠先生をはじめとする診療ガイドライン作成委員会により、令和2年度までに皮膚悪性腫瘍診療ガイドライン第3版の作成が完了しました。6つの疾患を統合した書籍の出版準備が進められているところです。メラノーマや皮膚リンパ腫の新薬の開発や、がんゲノムシーケンスの実臨床導入に伴い、皮膚がん診療を取り巻く環境は動き続けています。新

規薬物療法は生存期間の延長に寄与する一方で、効果が得られにくいサブタイプに対しては治療開発のさらなる取り組みが必要です。また、稀少な皮膚腫瘍においては、症例が少ないが故に標準的な薬物療法が確立していないという問題も抱えています。こうした問題を打破し、皮膚がん診療の充実のために当学会の果たすべき役割は益々高まっているところであります。一方、

昨年度の学術大会においては、がん研究会研究所長の野田哲生先生と国立がん研究センター東病院院長の大津敦先生を松本市にお迎えし、野田先生にはがんゲノム情報による個別化医療の開発、大津先生にはビッグデータの活用を含めた治療開発について御講演をいただきました。皮膚がん領域においてもゲノムシーケンスを活用した治療のプラットフォーム整備が望まれるところです。

皮膚がん診療においては、外科治療はもとより、薬物療法や放射線治療の他、緩和ケアも重要であり、皮膚科医、形成外科医、放射線科医、病理医、腫瘍内科医、基礎研究者が相互に協力することが欠かせません。当学会の目標として持続可能な皮膚がん診療を掲げ、学会員の多様性を尊重し、診療科相互の連携を高めたいと考えます。また、副理事長の宇原久先生を中心に若手の育成にも取り組んで参ります。皆様のご理解ご協力をお願いします。

大会案内



澤村大輔
(弘前大学大学院
医学研究科・皮膚科学講座)

この度2022年6月24日(金)～25日(土)に第38回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会を開催させて頂くことになりました。このような機会を与えていただいたことは大変光栄なことと存じており、関係者の方々に深く感謝申し上げます。

さて、本学会の特別講演では、弘前大学出身の、現東北大造血管病理学の一迫 玲教授に先生の開発された統合診断システム(ADYD System)によるリンパ腫の診断のお話を賜ります。また、はやぶさプロジェクトで有名な川口淳一郎先生が弘前高校出身であることからご講演をおねがいしたところご快諾いただきました。小惑星イトカワやイオンエンジンのお話をい

ただけると思いますので、本当にワクワクします。その他、例年通り、現在の皮膚悪性腫瘍分野診療に有益な、教育講演、シンポジウム、ワークショップ、CPG、一般演題などを準備しております。

今回の学会の開催形式は新型コロナウイルス感染症状況がまだ確実な見通しの立たない中、2021年度学術大会の総会で対面とウェブのハイブリッド形式で行うことをご了承いただきました。それにとともに、会場も民間のホテルから、弘前市が運営する弘前市総合学習センターに変更しました。そのため、学会会場は5つありますが、各会場の収容席数は多くなく、非常に手狭になっております。もちろん、なるべくたくさんの方々にご参加いただけることを望みますが、青森県は東北地方の中でも感染者数が多い地域ですので、コロナ前のようにたくさんの方が当地に訪れますと一般市民の方々に影響があるかもしれませんので、どうぞご容赦、ご配慮いただけますようお願い申し上げます。

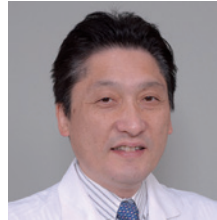
ハイブリッド形式には不慣れたため行き届かない点や満足度のいかな点などお気づきのことがあるかもしれません。皆様が有意義な2日間を過ごせるよう精一杯の準備をしております。教室員一同、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

会員の現況

会員の現況
(令和4年4月30日現在)

| | |
|------------------------------------|--------|
| 会員数 | |
| 一般会員 | 1,359名 |
| 賛助会員 | 3社 |
| 東レ(株)・(株)ミノファergen製薬・ノバルティスファーマ(株) | |
| 名誉会員 | 25名 |
| 功労会員 | 65名 |
| 合計 | 1,452名 |

悪性黒色腫（メラノーマ）薬物療法の手引き作成委員会



委員長：山崎直也
（国立がん研究センター中央病院 皮膚腫瘍科）

近年の悪性黒色腫に対する薬物療法の進化のスピードに対応するため、日本皮膚悪性腫瘍学会悪性黒色腫（メラノーマ）薬物療法の手引き作成委員会では、2016年夏にメラノーマの診療ガイドラインとは別に、新たに「悪性黒色腫（メラノーマ）薬物療法の手引き」を作成、今回は3回目の改訂となります。2022年版の特徴は治療選択アルゴリズムに遺伝子パネル検査が加わったことです。この検査でNTRK融合遺伝子が陽性であれば、分子標的薬エヌトロチニブとトロトロチニブが悪性黒色腫にも投与可能です。NTRK融合遺伝子陽性率は日本人に多いacral melanomaで2-5%と決して高くはありませんが、1-2数年治療が増えたとはいえ相変わらず手ごわい相手である悪性黒色腫に保険適用可能な治療法がひとつでも増えたことは治療を待つ患者さんにとっては朗報です。遺伝子パネル検査の結果によっては他臓器がんの治療薬が臓器横断的にメラノーマに投与可能な場合や開発中の新薬が使えることもあります。あらゆるチャンスを見逃さず、最善の診療を提供しようという心構えは必要であると思います。

一方でアルゴリズムの遺伝子パネル検査の対側にはbest supportive careの選択肢もあります。進行がんの薬物治療もセカンドライン以降になってくると積極的治療の持つ意味をよく考えることも重要です。強引な積極的治療より、緩和ケアの導入が患者さんのQOLの改善に結びつくこともしばしばです。

治療法の進歩に伴いがん薬物療法はより高度に専門化かつ複雑化しています。効果的で安全な薬剤の使用を目指すためにも、今回の改訂版をぜひ臨床の現場で活用して下さい。

雑誌委員会

委員長：門野岳史 聖マリアンナ医科大学皮膚科

奥山隆平先生の後任として2021年より雑誌委員会の委員長を務めています。

Skin Cancer 誌は年3回オンラインジャーナルとして発行しています。学術大会の教育講演などからの総説と一般演題からの症例報告が2本の柱であり、皮膚悪性腫瘍の知見を得るのに打って付けの内容になっています。2020年度はCOVID-19の影響で投稿数が減少したのですが、昨年度は例年並の投稿をいただき、安堵しているところです。雑誌の発展はやはり会員の皆様からの投稿にかかっています。専門医取得のための実績単位にもなりますので、興味深い研究や症例がありましたら、是非Skin Cancer 誌への投稿をご検討ください。

皮膚悪性腫瘍診療ガイドライン作成委員会

委員長：中村泰大（埼玉医科大学国際医療センター 皮膚腫瘍科・皮膚科）

2021年より菅谷誠先生の後任として本委員会の委員長を務めさせて頂いております。皮膚悪性腫瘍診療ガイドライン第3版は2019年度から2021年度にかけてメラノーマ、有棘細胞癌、基底細胞癌、乳房外パジェット病、血管肉腫、皮膚リンパ腫の6がん種で改訂が終了し公開にしております。また、これら全がん種の診療ガイドラインを収載し単行本化した書籍が金原出版株式会社より2022年6月30日に刊行予定です。

第3版よりGRADE systemに準拠したガイドライン作成となりましたが、その質の高さは世界的な評価を受けております。メラノーマ診療ガイドラインでは、世界各国メラノーマガイドラインの質の高さを評

事務局より

▶JCS LETTERS デジタル化について

今号より、先年の評議員総会で承認されましたJCS LETTERSのデジタル化が本格的に始まりました。デジタル化とともに作成作業の外部委託化を進め、作業と運用の両面の効率化が実現いたしました。デジタル版のメール配信とともに、従来通りHPへの掲載も継続して行います。ご理解のほどお願いいたします。

▶メンバーリスト構築について

会員への連絡を迅速かつ円滑に実施するため、メンバーリストの構築を目指しております。会員皆様のご協力によりまして2022年3月末までに、全正会員の約86%のメールアドレスを登録いただきました。引き続き、100%を目指してまいりますので、登録がまだの会員におかれましてはご協力のほどお願いいたします。jcs@rinsyo-yaku.co.jp までお願いします。

（文責）事務局 木庭幸子

価した海外誌のreview articleにおいて、29ガイドライン中13位であり、NCCNガイドライン（22位）やESMOガイドライン（9位）より高評価でした（Jacquin C. et al. JPRAS Open 31: 114-122, 2022）。これもGRADE systemによる作成を主導してくださいました前委員長の菅谷誠先生、統括委員の古賀弘志先生、日本皮膚悪性腫瘍学会、日本皮膚科学会のガイドライン委員会の諸先生型の皆様のおかげと存じます。

ガイドライン作成の宿命とはなりますが、診療の進歩に応じて数年に一度の改訂が不可欠であります。改訂には年月を要することから本年度から改訂作業に入ることを考慮しております。世界的評価の高いガイドライン作成手法を踏襲しつつ、第3版の問題点であった各がん種の公開時期のずれやクリニカルフェスティョンの少なさなどを改善し、ガイドライン作成委員の増員、役割の交替などを含めた新たな陣容で臨むこととなると思われまます。本邦皮膚がん領域に従事される先生方に少しでもお役に立てるようなガイドラインが継続して作成できるよう、微力ながら尽力できればと思います。